TADOKU JUNIOR　アンデルセン童話　★★★☆☆ ふつう　669語

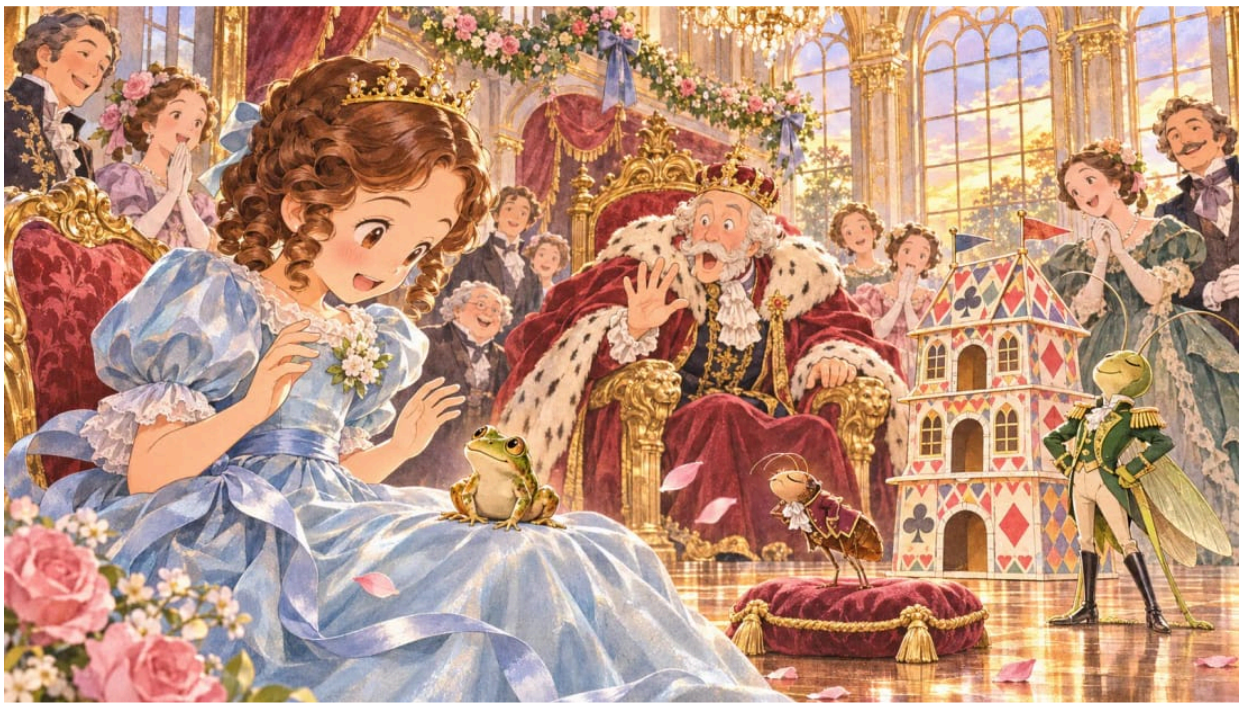
The Leap-Frog

とびくらべ

Hans Christian Andersen (tr. H. P. Paull et al.)（1846年の本）　原文そのまま　朗読：KathleenLarberg

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？　ノミとバッタとピョンピョンガエルが、王女さまをかけて高とびくらべ。じまんばかりのノミとバッタに対して、だまっているピョンピョンガエルは……。



A Flea, a Grasshopper, and a Leap-frog once wanted to see which could jump highest; and they invited the whole world, and everybody else besides who chose to come to see the festival. Three famous jumpers were they, as everyone would say, when they all met together in the room.

“I will give my daughter to him who jumps highest,” exclaimed the King; “for it is not so amusing where there is no prize to jump for.”

The Flea was the first to step forward. He had exquisite manners, and bowed to the company on all sides; for he had noble blood, and was, moreover, accustomed to the society of man alone; and that makes a great difference.

Then came the Grasshopper. He was considerably heavier, but he was well-mannered, and wore a green uniform, which he had by right of birth; he said, moreover, that he belonged to a very ancient Egyptian family, and that in the house where he then was, he was thought much of. The fact was, he had been just brought out of the fields, and put in a pasteboard house, three stories high, all made of court-cards, with the colored side inwards; and doors and windows cut out of the body of the Queen of Hearts. "I sing so well," said he, "that sixteen native grasshoppers who have chirped from infancy, and yet got no house built of cards to live in, grew thinner than they were before for sheer vexation when they heard me."

It was thus that the Flea and the Grasshopper gave an account of themselves, and thought they were quite good enough to marry a Princess.

The Leap-frog said nothing; but people gave it as their opinion, that he therefore thought the more; and when the housedog snuffed at him with his nose, he confessed the Leap-frog was of good family. The old councillor, who had had three orders given him to make him hold his tongue, asserted that the Leap-frog was a prophet; for that one could see on his back, if there would be a severe or mild winter, and that was what one could not see even on the back of the man who writes the almanac.

"I say nothing, it is true," exclaimed the King; "but I have my own opinion, notwithstanding."

Now the trial was to take place. The Flea jumped so high that nobody could see where he went to; so they all asserted he had not jumped at all; and that was dishonorable.

The Grasshopper jumped only half as high; but he leaped into the King's face, who said that was ill-mannered.

The Leap-frog stood still for a long time lost in thought; it was believed at last he would not jump at all.

“I only hope he is not unwell,” said the house-dog; when, pop! he made a jump all on one side into the lap of the Princess, who was sitting on a little golden stool close by.

Hereupon the King said, “There is nothing above my daughter; therefore to bound up to her is the highest jump that can be made; but for this, one must possess understanding, and the Leap-frog has shown that he has understanding. He is brave and intellectual.”

And so he won the Princess.

“It's all the same to me,” said the Flea. “She may have the old Leap-frog, for all I care. I jumped the highest; but in this world merit seldom meets its reward. A fine exterior is what people look at now-a-days.”

The Flea then went into foreign service, where, it is said, he was killed.

The Grasshopper sat without on a green bank, and reflected on worldly things; and he said too, “Yes, a fine exterior is everything—a fine exterior is what people care about.” And then he began chirping his peculiar melancholy song, from which we have taken this history; and which may, very possibly, be all untrue, although it does stand here printed in black and white.

あるとき、ノミとバッタとピョンピョンガエルが、だれがいちばん高くとべるかくらべてみようということになりました。そこで、世界じゅうの人たちと、そのお祭りを見に来たいほかのみんなをまねきました。三匹がそろって部屋に集まると、だれもが言うように、三匹とも有名なとびはねの名人でした。

「いちばん高くとんだ者に、わたしのむすめをやろう」と王さまはさけびました。「ごほうびがなくてはとんでもあまりおもしろくないからな。」

まず最初に進み出たのはノミでした。ノミはとても上品なふるまいで、まわりのみんなにあちこちおじぎをしました。というのも、ノミには高貴な血が流れていたうえ、人間とばかりつき合いなれていたからです。それは大きなちがいなのです。

次にバッタが出てきました。バッタはノミよりずっと重かったのですが、ぎょうぎがよく、生まれつきの権利として緑の制服を着ていました。そのうえ、自分はとても古いエジプトの家がらの出で、今住んでいる家ではたいそう大事にされているのだ、と言いました。じつのところ、バッタは野原から連れてこられたばかりで、トランプの絵札でできた三階建ての紙の家に入れられていたのです。色のついた面が内側になっていて、戸や窓はハートのクイーンの体を切りぬいて作ってありました。「ぼくはとても歌がうまいんだ」とバッタは言いました。「だから、生まれたときからずっと鳴いているのに、トランプの家に住ませてもらえない十六匹の土地のバッタたちは、ぼくの歌を聞くと、くやしくてくやしくて、前よりもやせてしまったくらいさ。」

こんなふうに、ノミとバッタは自分のことを話して、王女さまと結婚するのに自分はじゅうぶんふさわしいと思っていました。

ピョンピョンガエルは何も言いませんでした。でも人々は、だからこそ、よけいに考えているのだろうと言い合いました。そして飼い犬が鼻でくんくんとにおいをかぐと、ピョンピョンガエルはよい家がらの出だとみとめました。年をとった大臣は、口をつつしむようにと、くんしょうを三つももらっていたのですが、ピョンピョンガエルは予言者だと言いはりました。せなかを見れば、きびしい冬になるか、おだやかな冬になるかがわかるというのです。そんなことは、こよみを書く人のせなかを見たってわからないのに。

「たしかにわたしは何も言わない」と王さまはさけびました。「だが、それでもわたしには、わたしの考えがあるのだ。」

いよいよ、とびくらべが始まりました。ノミはあまりに高くとんだので、だれにもどこへ行ったのか見えませんでした。それでみんなは、ノミはぜんぜんとばなかったのだと言いはりました。それはひきょうなことだ、というのです。

バッタはその半分の高さしかとびませんでしたが、王さまの顔にとびついてしまいました。王さまは、それは失礼なことだと言いました。

ピョンピョンガエルは長い間、じっと考えこんで立っていました。とうとうみんなは、ピョンピョンガエルはぜんぜんとばないのだろうと思いました。

「ぐあいが悪くないといいんだけど」と飼い犬が言いました。そのとき、ぴょん！ピョンピョンガエルは横の方へとんで、すぐそばの小さな金のこしかけにすわっていた王女さまのひざの上に乗ったのです。

そこで王さまは言いました。「わたしのむすめより上のものは何もない。だから、むすめのところへとびあがるのが、いちばん高いとび方なのだ。だがそのためには、知恵がなくてはならない。そしてピョンピョンガエルは、知恵があることを見せてくれた。勇気があって、かしこい者だ。」

こうして、ピョンピョンガエルが王女さまをお嫁さんにしました。

「ぼくにはどうだっていいさ」とノミは言いました。「あんな年よりのピョンピョンガエルでよければ、くれてやるよ。いちばん高くとんだのはぼくなのに。でもこの世の中では、ほんとうの力がむくわれることなんてめったにないんだ。今どきの人は、見た目のりっぱさしか見ないのさ。」

それからノミは外国の軍隊に入りました。うわさでは、そこで死んでしまったそうです。

バッタは外の緑の土手にすわって、世の中のことをあれこれ考えました。そしてバッタもまた言いました。「そう、見た目のりっぱさがすべてさ。みんなが気にするのは見た目のりっぱさなんだ。」それからバッタは、あの変わった悲しげな歌を鳴きはじめました。このお話は、その歌から聞いたものです。ですから、ここにちゃんと印刷されてはいるけれど、もしかしたら、みんなうそっぱちかもしれませんよ。

たんご と クイズ とびくらべ

Flea ノミ	**Grasshopper** バッタ	**King** 王さま
jump とぶ・とびはねる	**lap** ひざ（すわったときのももの上）	**stool** こしかけ

Q1 ノミがとんだとき、どうしてみんなは「とばなかった」と言ったの？

① こわがってとばなかったから　② 高すぎてどこへ行ったか見えなかったから

③ 王さまの顔にとびついたから

Q2 ピョンピョンガエルはどこへとんだ？

① 王女さまのひざの上　② 王さまの頭の上　③ 飼い犬のせなか

Q3 王さまが、ピョンピョンガエルのとび方がいちばん高いと言ったのはどうして？

① いちばん長くとんでいたから　② いちばん大きな声を出したから　③ むすめより上のものはないから

こたえ

Q1 ②　ノミはあまりに高くとんだので、だれにも見えませんでした。それでみんなは、とばなかったのだと言ったのです。

Q2 ①　ピョンピョンガエルは横へとんで、金のこしかけにすわっていた王女さまのひざの上に乗りました。

Q3 ③　王さまは「むすめより上のものは何もない。だからむすめのところへとぶのがいちばん高い」と考えたのです。

原田英語の多読ベストジュニア

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #1597（Hans Christian Andersen (tr. H. P. Paull et al.)、1846年）。パブリックドメイン。

挿絵：この本には挿絵がないため、場面をイメージして AI（Codex）で描いた絵です。

朗読（Web版）：KathleenLarberg（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）

和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは３重チェック。人の目でも順次確認しています。